寓話

ギューニャン

三日月てりり

ギューニャン物語

三日月てりり　5/7　8:37

ギューニャンは牛だよ。でも猫。それは嘘。だってギューニャン女の子。中学生だよ。人間だもの。人間の、牛乳配達女子中生。それがギューニャン。

ギューニャンは田舎に住んでる。山を登ったり下ったりして生活してる。駅は遠いから歩く。バスは無くなった。自転車はなんか上手く乗れなくて、自動車は免許が無い。バイクもまだ免許がとれないし、三輪車だとむしろ遅い。

朝5時に、配達してから牛乳を、ちょっと飲んだり、戻したり。駅まで歩いて電車に乗って、3時間ほど経ちました。あら不思議、ここは都会の学校です。東京都心の中学です。今日もみんなに挨拶です。ギューニャン ギューしてニャン！ 女子友ピッピ ギューニャン！ ギュー」

男子友ポチ太郎「バッハッ、ギューしてワン！」ギューニャン ギューニャン！ ギューニャンには友達がいるみたい。本当かな。彼らは本当の友達かわからないけど、なんだか友達っぽい感じがします。本当の友達かわからないけれど。キンギョ先生 授業するよー！ ギューニャンは寝ていいよ」

ギューニャンは早起きです。眠いのです。眠くて学校に通う意味もわからないまま眠るのです。こんな学校、燃やしてやりたい。そんなことを思うトカゲ丸に気づくことなくギューニャンは眠ります。こんこんと。

保健室の白山羊メエ先生「ギューニャン、起きなさい」ギューニャン ギュニャ？」メエ先生「もう夜よ」ギューニャン「あれえ？ 帰らなきゃ」電車に乗って3時間、揺られて帰って駅につく。もう夜中。眠いよう。駅前の回転寿司をつまんで帰宅。ギューニャンしながら眠ります。ぎゅにゃ。

これが、一ケ月三十一日、一年三百六十五日、毎日毎日続きます。週末だって学校へ行き、眠って揺られて帰ります。ギューニャンしながら帰ります。配達さぼって帰ります。牛乳飲んじゃって帰ります。だって眠いもん。だって眠いもん。

ギューニャンがギューニャンしながら牛乳を飲んで、牛乳を配達しながら牛乳を飲んで、登校しながら牛乳を飲んで、授業中にギューニャンしたり寝ながら牛乳を飲んで、机に突っ伏して寝たり保健室で寝たりギューニャンしたり、そんな風に過ごしていると、あるとき大変なことが起こりました。それは

中学から、追い出されてしまったのですーギューニャンはもう中学三年生だったのに、四月から翌年三月まで眠り続けました。牛乳を飲んだりしながら眠りました。ときには帰宅することもあったけど、基本的には、そして包括的には、眠りました。だから卒業したのです。授業なんか受けてないのに！

これはおかしい、そう思ったギューニャンは教育委員会や区や都や国や大臣や天皇や、外国の大統領や首相や国王に聞いてみました。ギューニャン ギューニャンは中学生だから中学に通いたいです」と。すると皆は特別なはからいをしてくれました。ギューニャンが哀れな存在だからです。よかった。

ギューニャンは中学を卒業した十五歳から、次の誕生日には十二歳ということにしてもらいました。そしてその翌年も、その翌年も、ずっと毎年十二歳の誕生日が来ることになりました。中学を卒業したときは、また同じ学校の中学一年に入りました。永劫の時を手に入れたのです。

ギューニャンは女子中学生だけど、ギューニャンすることで牛乳がニャンと配達できます。初めての配達のとき。配達するには足が必要で、そのためにギューニャンは手を使って配達し、賃金を得て、足を買ったのです。偉い子です。ギューニャン偉い子。良い子。がんばりやさん。ギューしてニャンなの。

ギューニャンはあるとき気づいてしまった。ギューニャンは、ギューニャン星から来たギューニャンだって。だから人間じゃないんだ。人間じゃないんだギューニャンは。うわあ。ポチ「ワン？」ピッピ「ピピッ？」キンギョ先生「ギョギョッ？」大丈夫。みんな人間じゃなかった

ギューニャン祭りが開催されました。みんなでギューしてニャンと鳴くお祭りです。都心から地方へ、四十七都道府県の皆が口々に「ギューニャン！」「ギューニャン！」、ギューニャンは嬉しくなって、みんなとギューニャンしました。大自然は温かくギューニャンを見守りました。

ギューニャン春のパンパン祭りが開催されました。ギューニャンしながらパンパンするのです。ギューしてパンパン！　ニャンニャン泣いたらゲームセット。これは悲しくなる人がいたので、切ないお祭りになりました。泣かないでギューニャン、明日はあるよ。

ギューニャン大好きイベント「ぎゅーっとして　にゃーっときて」開催。ギューニャンの心をニャンニャカするギューギューイベント。ギューってしまくってみんなギューギューにゃん。これは嬉しくて、みんな大好きでした。

ギューニャンたちの平和な楽園生活に、重大な危機が訪れました。ギューニャンたちの通う中学校に、戦争がやってきたのです。外国の軍隊です。怖い。ギューニャンは牛乳を配ります。なんと外国がなくなりました！　なんでだろう、どうしてだろう。わからないけれど、きっと特別な牛乳だったんだ、多分

廃墟と化した壊れかけの中学校で、ギューニャンは思いました。ギューニャン　牛乳飲んでギューニャンにゃー！ ギューニャンは世界中の人々に牛乳を届けることを決意しました。毎日毎日、牛乳を届けるのです。飢える人に牛乳を。お腹を壊さない牛乳を、どこへでも、いつまでも。今日もどこかへ。

ギューニャン物語　牛乳編　完

ギューニャンの異次元漂流

三日月てりり　5/7　9:46

ギューニャンはポチとピッピと一緒に洞穴に行きました。そこには虹色の不思議な液体が満ちていて、この世のものとは思えない幻想的な景色が見えました。ギューニャンたちは飛び込みました。勇者の心があるみたい。液体は揺らめいて別世界へと誘いました

異次元のギューニャンたちは幻想的な雰囲気の謎世界へやってきました。そこでは卵に手足が生え、ぶつかり稽古をしては壊れていました。卵の一人、僕達はぶつからないではいられない、だけどどうして、壊れて死んでしまう、なんて悲しい運命なんだろう」ギューニャンは卵を一人残らず茹でました。

ギューニャン『これで中身が固まったニャン」卵『奇蹟！ 神秘！ 殻は割れても中身はしっかりしてる！ 寿命がほんのわずか伸びたよ！ 嬉しいよ！』ギューニャンはとびっきり感謝され、卵の世界で怖れられる、かつて卵だったのに恐るべき化物になってしまったかつての仲間、ひよこを貰いました

ピッピ「あら、私に似た人ね、くちばしがあるし羽もあるのね」ひよこ『ピヨッ」ピッピ「あらかわいい、ピヨと名付けましょう」ギューニャン『ピヨニャン、ピッピニャン、ピヨピッピニャン！』楽しそうです。

ポチは食欲を刺激されています。ギューニャン『さあ行くにゃん！ どこかへ！』幻想的な雰囲気がどこかしことなく遍在するこの世界、どこへいっても異国情緒が漂って不思議で嬉しい。だから特にどこかを目指すでもなく歩いていくと、人々が歩いています。服が素敵。

素敵な服のお姉さんに目を奪われてついていくギューニャンたち。素敵姉『ストーカー！』ギューニャン『牛乳飲むにゃ！』無理矢理牛乳を飲ませて息の根を止めました。ポチ『あぶなかったワン」ピヨとピッピは肉をついばみ、ポチは骨をしゃぶります。ギューニャンは牛乳を飲んで寝ちゃった。

お腹もいっぱいになって、うっとりすごすみんな。異国情緒の建物が夕焼けに照らされてきれいです。ポチ『そろそろどこかへ帰ろうワン」ギューニャン『ギューニャン！』ピヨとピッピはどこか所在なさげ。ピッピ『こわい……幸せすぎて」ピヨ『ピヨピーヨ」ギューニャン『杞憂ニャン！』

その一言で和んだときです。警察『警察だー！ 逮捕！ 殺人！ 人間失格！』ギューニャン『ギューニャンはギューニャンにゃからギューニャンにゃよ？」ポチ『わんわん、ポチもワンワンわん！』ピッピ『あ、あた、あたし、と、と、」警察『人権が無い！ 人間じゃない！ 殺す！』逃げます

ギューニャンたちは逃げました。野を超え、山を超え、川を超え、海を超え、空の彼方へ逃げました。すると天空に虹色に輝く空間がありました。全速力で入りました。命からがら逃げました。追ってきた警察も入ります。ギューニャン世界へやってきた。ギューニャン『ニャー！』

ギューニャンは虹色の空間から出た瞬間に、大量の牛乳を異国の警察たちに浴びせました。圧力で押し戻された異国の警察は、虹色の出口へと戻され、生理的に耐えられなくなった虹色空間は、押し当てられる異国の警察をどこでもない次元のはざまへ弾き飛ばしました。ギューニャン『やったニャー！』

ポチ やったワン！ ピッピ やったピー！ ピヨ ピヨピヨ！元の世界へと戻ったギューニャンたちは、不思議な世界の大冒険のお話をみんなに聞かせて、その語りは音源化され、話はジュヴナイル小説化され、映画化され、DL販売され、大金をせしめて裕福になりました。よかったね ギューニャン！

ギューニャンの異次元漂流　漂流したのは異国のK編　終わり　　2017/5/7　10:47

WEB連載版ギューニャン（2016年秋）

ギューニャン

第１話　「ギューニャン」

作　三日月 てりり

2016/10/03

少女趣味パジャマの少女ギュー。見た目は人間そのもので、とってもかわいい女の子。でもね、実は牛なの。牛だけど人間で、人間だけど、ちゃんと牛。

ギューは自室の窓から夜空をみる。外に出る。

「星座っていろいろあるみたい、でもよくわかんないな、乳牛座はないのかな、かわいい猫座が欲しいよ、あるのかな」

ギューはパジャマのまま散歩にでかけて、すぐ近くの星降る丘に登ってる。丘から見る星空は例えようもなくきれいで、吸い込まれるような陶酔を感じて、いてもたってもいられないくなって、胸いっぱいの切なさを感じてる。

「なんで涙がこぼれてくるんだろうね、世の中のみんなが幸せだったらいいし、病気もない世界になって、みんなお金持ちで、心が美しかったらよかったのにな」

ギューが泣いてると、その足に何かが触れる。

「えっ？！」

辺りには誰もいないと思ったのに、ギューが足元を見ると、かわいい何かが「ニャン」と鳴く。

猫、かわいい、あたしギュー」

猫はギューの足に額から擦り付く。そして、しゃがみこんだギューの鼻先をペロッと舐めて、駈けていく。

「慰めてくれたのかな、ありがとう、ニャンちゃん」

それからギューは部屋へと帰って、猫の夢を観ながら、眠った。

その夜更け。さっきまであれほど快晴だった空が、急に雲にまみれ、辺り一面、土砂降りになる。

猫のニャンは逃げ惑う。

「ニャン！ ニャン！ ニャン！」

大変、大慌て！ 逃げても逃げても大粒の痛い雨が追っかけてくる。

「ニャン！ ニャン！」

ニャンは痛みに耐えてよく頑張りながら、雨宿りできる大きなひさしのある人家の、一段高い玄関にたどり着く。

「ニャ～ン」

もう疲れ切って、べっとりとお腹も頭も床について、力尽きそうな心もとなさ。そんなニャンを覗き込む大人の男がいる。この家の人がニャンに気づいて出てきたみたい。

「んー。猫だね。私は猫の言葉が喋れるんだ。ふふ、驚いたかい？ まあ、とにかく君、いろいろ任せてくれたまえ」

確かに猫語を話してると思いつつ、何を任せて欲しいのかわからないまま、ニャンはもうどうにも力が入らず、されるがままになっている。

連れてこられた部屋には科学の装置が山のようにあり、手術台に繋がれて、ニャンはもう、爪を出す元気も無い。

「これは心を読み取る機械だ。記憶も願いも全て解る。ほう、君はニャンと云う名か。そしてさっき出会った人間の女の子ギューが好きなのか」

ニャンはドッキリ！ 衰弱して声もだせないまま死にそうな気持ちになる。

『では人間に改造してやるから、求め合って交尾し子孫を残しなさい。なあに、私はケモナー博士。不可能は無い』
ケモナー博士はそう言うと、ニャンに麻酔をする。ニャンはトロトロとプリンになってとろけていく。そしてギューの夢をみながら、眠った。
目が覚めたニャンは人間になっていた。なんだかよくわからない背格好、服、爪が出ない、声が変、二本足で立ってる。もう意味がわからない。
これが人間なの???
『ふふ、驚いたかい？　私は獣を改造するのが大好きなんだ。君は人間になった。でも実際のところ、君は未だに猫でもある。そう、私に改造された人間猫は、人間であり、かつ、猫なのだ。知識の乏しい技術者は人間だけとか、猫だけとか、人間でも猫でも無いものなんかにしがちだが、嘆かわしいことだ』
ニャンはギューに飼われてギューに可愛がられてギューのベッドで一緒に眠ったりしたかった。そうは思った。でもこんな姿になったら、もう可愛がってもらえないじゃないか。そう思っていることを博士は機械で読み取って
『君はかわいい。美しい。ショタ好きで君に夢中にならない者はいない。十分だ。最高に幼さを感じさせる少年だ』
ケモナー博士はケモナーでありかつショタ好きかつロリ好きである自負も世界一であるため、容姿には大変厳しい。そのケモナー博士の美意識が、ニャンを美少年として改造させたのだ。だから大丈夫なのだと言う。
ニャンは釈然としない気持ちだったけれど、もう雨もあがり、朝焼けの見える窓の向こうにギューがいると思うと何もかもどうでもよくなり、ギューのもとへと走らずにはいられない。
『ギュー！　ギュー！　ギュー！』
朝、学校へ行こうと外へ出たギュー。昨日の猫を思い出しながら、一人、話しながら軽やかに歩く。
『私、あの猫が好きみたい。連れてきて飼いたいな。できれば人間の男の子になって、迎えに来て欲しい。でもきっと無理だよね、私、牛だもの。人間だけど、牛だもの。人間から愛してもらう資格なんて無い、でも、猫だったら、私を愛してくれるかもしれない』
ギューは牛である運命、牛乳の美味しさ、プリンは至高、猫は人より上位の存在であること、などを考えながら、言う
『でもやっぱり自分を受け入れてくれる存在なんかこの世界のどこにもいないかもしれない、一生、誰からも、愛してもらえないかもしれない、お父さんやお母さんは愛してくれるけど、そういう愛じゃなくて、私が言ってるのは、私、私を、必要としてくれる他者が、この世界のどこにもいないんじゃないかって、そういうことで』
ギューの顔が曇って泣き出した時、そこに、今まで見たこともないような美少年が来て、言った。
『ギュー、僕はニャン、昨日の猫だよ、僕は君を必要としてるんだ、愛してるんだ、時間なんて関係無い、ギューニャンしよう、ギューとニャンとで、ギューニャンしよう』
ギューは忘我して、その言葉を全て受け入れ、ニャンを全て受け入れ、生涯永遠にニャンと共に歩むことを心に誓った
『ギューしよう』
『うん』
『ニャンニャンしよう』
『うん』
『ギューして』
『ニャン♡』
『ギューして』
『ニャン♡』
『ギューして、ニャンして、ギューニャンにゃー』
『ニャーーンっっっっっっっ』
こうして、二人はギューニャンになった。
『二人合わせてギューニャンにゃー』
『牛乳ギューニャンにゃー』
『わーい！』

抱き合ったまま二人はギューニャンを褒め称え合い、合体ケモノ人間ギューニャンとして、生きていくのだった。

ギューニャン第一話　「ギューニャン」　終

次回予告、第二話　ギューニャン、牛乳を売る」乞うご期待！

ギューニャン

第二話　「ギューニャン、牛乳を売る」

作　三日月 てりり

2016/10/10

ギューニャンはとっても幸せにゴロンゴロン。
「ギューニャーーン♡」
ギューギューにゃんにゃんドタンバタン。
「ギューニャンはギューにゃから牛にゃ、にゃからギューニャン牛乳が湧いてでるにゃ！」
ギューニャンはギューだから牛乳がギューニャンなので、その牛乳を売り歩くことにしました。
早速、国で一番の街の駅前に行くと
「愛のぐうぬう、ギューニャン牛乳にゃ！」
その声を聞いて、ぐうぬうとは何か気になった人々が振り向くと、なんと駅前には牛 猫 人の、どのようにも見える不可思議な生物がいて、牛乳を売っています。ギューニャンです。でも人は驚き、神聖さを感じ、ひれ伏しながらも、どうしても目が離せない何かを感じて、一人また一人と牛乳を買って飲みました。
「美味しい！ 元気！ 猫くさい！」
「おお、わしがこの牛乳を飲んだら、娘の病気が治った！」
「私の先祖の霊が、この牛乳の聖なる力で許され、今まさに成仏しました」
などの感想を得て、ギューニャンは上機嫌。
「ギューニャン、愛の象徴にゃ！ 愛のギューニャン牛乳にゃ！」
人々は絶賛し
「ぐーなんぐうぬう」
「ぐーなんぐうぬう」
「ぐーなんぐうぬう」
と褒め称えました。
「ギューニャン牛乳にゃ！」
そう言い残してギューニャンは次の町へと移りました。
……そのようにして売り歩き、国中の街で大評判になったギューニャン牛乳。しかし小さな街へ、小さな街へと移っていくと、牛乳を買えない子にも出会ったりします。
「いいにゃ、あげるにゃ！ ギューニャンにゃ！」
ギューニャンは、牛乳を買うどころか、呼吸さえもままならない、息も絶え絶えの行き倒れの子供に、ギューニャン牛乳を与えました。喉を広げてゴクゴク飲ませました。
「愛を飲むんにゃ！」
「ん、んん」
「飲めば愛し愛されるにゃ」
「ん、あ、あ」
「よし飲んだにゃ」
ギューニャン牛乳を飲むや否や、子供は元気になってすっくと立ち上がり、丁寧な言葉づかいで言いました。

「○▷□%&$#＝＊＋～」　×
「ギューニャン、わからにゃん」
しかし子供は笑顔でギューニャンの手伝いをしだしました。
「ギューニャン助かるにゃん」
「○▷□%&$#＝＊＋～」　×
「ミャニャミャ？　名前かにゃ？　ミャニャミャ！」
ギューニャンが聞き取ったミャニャミャ。その手伝いの的確なこと、なんという頭の良さ、段取り世界一の手腕によって、ギューニャン牛乳はさらに飛ぶように売れました。
「わあ、ギューニャン牛乳、にゃんにゃん売れてるにゃ！　売れ売れのギューギューにゃ！」
ギューニャン牛乳の噂は各種マスコミやネットニュースによって海を渡り、全世界から求められるようになりました。
「ギューニャン牛乳すごいにゃ～、愛が世界に注がれるにゃ」
ギューニャンの愛が全世界に届き、そんな中から一組の男女が、ギューニャンを、訪ねてきました。
「○▷□%&$#＝＊＋～」　×
「にゃ！？　にゃんだか聞いたことある言葉にゃ」
「○▷□%&$#＝＊＋～」　×
「○▷□%&$#＝＊＋～」　×
「○▷□%&$#＝＊＋～」　×
「ギューにゃーーーー～ン！」
彼らは、ミャニャミャの親たちでした。そして彼らは世界を5つくらい買える大富豪でした。
ミャニャミャは彼らの資産を狙った何者かに誘拐され遺棄された子だったのでした。
ミャニャミャのことはとうに忘れて、代わりの子供たちをもつけて幸せに暮らしていたところ、なんということでしょう、ミャニャミャが有名になっているではありませんか！　それで親たちは嬉しくなって、ミャニャミャにお金をいっぱいあげたり、ミャニャミャの人気にあやかって自分達もチヤホヤされたり、牛乳を飲んでフィーバーしたいと思ったのです。
ミャニャミャは嬉しく、楽しく、ちょっぴり切なく、ほろ苦い甘さと、芳醇な薫り漂う涙を流しながら、ギューニャンをみたり親たちをみたりしています。
そしてミャニャミャはなんだかよく発音できない彼の名前で、親たちから呼ばれました。
「～～}}＜Lv＋ﾐﾐﾐ@」
ギューニャンはがんばったけど、がんばったけど、どうがんばっても上手く発音できなかったので、泣いたり喚いたり寝たり寝転んだり寝返りを打ちながらワンコ蕎麦を食べたりしながら、ミャニャミャの本名を呼ぶことを、ついに諦めましたた。
「ミャニャミャはミャニャミャにゃ！　ギューニャンはギューニャンにゃ！」
大富豪の親子は愛をとりもどし、ギューニャンは愛に喜び震えました。
「ギューニャン嬉しいにゃ！　これからは宇宙にも牛乳を売るにゃ！」
そして空を見て、飛び上がって、落ちました。

ギューニャン第二話　「ギューニャン、牛乳を売る」　終

次回予告、第三話　ギューニャン、雲にのる」乞うご期待！（これを書いた直後、死にたくなって、途絶）

謎の第三話が始まる

ギューニャン

第三話　『ギューニャン、雲にのる』

作　三日月 てりり

2017/5/16

ギューニャンは死にました。
そして空に昇りました。
ギューニャンの多摩市、ギューニャンの多摩市、市区町村、多摩市、そう、そこは多摩市なのです。
そしてギューニャンの魂は多摩市に宿り、天に召されました。そして召されてから思ったのです。
「ほっ、ギューニャン、天使にゃん？」
ジーザス！　ジーザスとは何だ、何か、キリスト教なのか？　いいえ違います。1980年台に日本の子供たちの間で大人気だった家庭用ゲーム機の金字塔、あのファミコンのソフト、そのタイトルなのです。ギューニャンは思ったのです。
『ギューニャンはジーザス好きにゃん。だからグロいエイリアンの出るファミコンソフトを好む女子中学生として、しかも牛を代表する大変な権力を持つ存在として、言わなければならにゃんのです。死後の世界のジーザスは、音楽すぎやまこういち、でなければならないにゃんにゃー』
そう、ギューニャンは死んでから聡明になりました。いいえ、それは嘘。だってギューニャンはギューニャンだから。
『ギューニャン雲に載るにゃん！』
それはきまぐれな、中国の三大奇書の猿気取りの牛でした。ギューニャンは猿のつもりで、牛ルック。そして猫パンチ。足は買いました。
「えいえい、雲から蜘蛛の糸を垂らすにゃん」
ギューニャンの垂らした糸に、地上という名の地獄から、人間という名の亡者たちが登ってきます。
『ギューニャンは良い子にゃから、救けるにゃんにゃよ』
人はどんどん登ってきます。一人残らず登ってきます。人々が全員糸にしがみついているのを確認すると、神様は彼らの居た地球を消滅させてしまいました。
『ぎゅぎゅっ！　ニャンとニャンと！』
ギューニャンの声に驚いた人間たちは地上を振り返りました。そして望郷の念に囚われて、遥か遠く遠く、永劫より遠い存在となった、自らの故郷目指して、降ってゆきました。降ってゆく人間にあたった下の人間たちも落ちてゆきました。一人残らず落ちてゆきました。
ギューニャン『にゃーーーん！　にゃんでにゃんで？！　にゃんでニャン！　みんな天国に来て何の苦もなく安楽に暮らせば幸せになれたにゃん、あーん、あーん』
ギューニャンは泣き出してしまいました。そしてギューニャンの涙は糸を伝って、途中で固まり、大地を形成し、海が出来、太陽を中心とした軌道に乗り、　塩水と共に、火と、生物と、その他いろんなものが出来ました。人間だって出来ました。
これが世に言う、天地創造です。ギューニャンの流した美しい涙が、この世界という結晶になったのです。
泣き疲れたギューニャンは雲から滑り落ち、そのショックでまた死んでしまいました。
誰かの声が聞こえます。
『ギューニャン、ギューニャン』
『ぎゅにゃ？』
目が覚めたギューニャンは、美しい見たこともない楽園にいました。
『ぎゅっぎゅー、にゃんにゃんにゃ、ここは天国にゃ？』

違うよギューニャン、ギューニャンは天国よりも美しい世界に生まれ変わったんだよ」
誰にゃ、どこにゃ」
ギューニャンの美しい心と涙が産んだ、ギューニャン世界だよ、ギューニャン。そして私は神だよ」
神？　それって美味しいにゃ？」
ギューニャン牛乳より美味しいものなんてないよ！　だからバターを作って、アイスを作って、みんなで食べてお祭りしよう」
ギューニャンと神様は、幻のような美しい世界で、息吹く生命を肴に、歌って踊って、ギューニャンしました。
ギューニャン　ギューして、にゃんにゃん、ギューニャンにゃ！」

第三話　ギューニャン、雲にのる」おしまい！

奥付

署名　寓話　ギューニャン

作者　三日月てりり
メール　teririweb@gmail.com

発行者　劇団ギューニャン
代表　三日月てりり

発行日　2017年5月16日　初版初刷

印刷　2017年5月16日　15時～15時半にかけて　三日月てりり自宅付近のコンビニコピー機にて

ギューニャン